

風の輪

危ぶまれる通園施設の存続と新制度移行により

淡路こども園 園長 岩崎隆彦

昨年10月、障害者自立支援法が本格施行され、児童施設も成人施設と同様に、契約制度に移行しました。日額制の導入により、障害児通園施設も大幅な減収に見舞われ、施設の運営が深刻な状況に陥っています。この19年度、20年度で、児童施設も従来の施設体系が根本的に見直される予定ですが、このままいけば、通園施設は運営上の困難から消滅しかねません。

幼児期は、子どもや家族にとっても、将来の発達や生活の基盤作りという意味で、非常に大切な時期です。障害があっても、その子らしく生き生きと生活していけるためには、発達と障害に応じた配慮を受けつつ、人への信頼、意欲、自己主張、自信を育む経験が必要です。また、保護者はわが子の障害を受け止めつ

つ、日常生活する様々な悩みや困難に対して、前向きな気持ちで対応して、一人ひとりの発達・障害に応じた療育、気持ちを通じる親子関係の形成、学齢期のアフターケア、支援者と専門家チームの協力などを柱に29年間、何百人の子どもとその家族を支援してきました。

専門施設としての役割と使命

淡路こども園では昭和53年（1978年）の開設以来、一人ひとりの発達・障害に応じた療育、気持ちを通じる親子関係の形成、学齢期のアフターケア、支援者と専門家チームの協力などを柱に29年間、何百人の子どもとその家族を支援してきました。

この間に、統合保育が普及し、保育所や幼稚園が障害のある子どもを受け入れるようになったことは喜ばしいことですが、現実を見ると、集団の中には、情緒的に不安定な子、自己主張ができない子、友だちとなじめない子など、個別の配慮を要する子どもが

ちで子育てできるような支援を求めています。

たくさんいます。また保育所や幼稚園では、

こども園があるから、大丈夫

淡路こども園には、「知的障害」を始め、「自閉症」「広汎性発達障害」などの診断を受けたお子さんが、お母さん、お父さん、きょうだいと一緒に通っています。親子通園のなかで、同じ立場の親同士の支えあい、子どもを理解する視点や実際の関わりを学ぶことを通し、次第に当初のショックや焦りから抜け出し、ゆとりをもって子どもと接することができるようになります。確かな手応えと自信が持てるようになると、「子どもが意

家族への相談・支援は十分できません。ですから、通園施設は必要なのです。安易になくしてはなりません。そこには、統合保育ではカバーできない、専門施設としての役割と使命があります。つまり個々の子どもものニーズに応じた療育（保育）、および家族への支援が求められているのです。

思や感情を伝えるようになった」「親子で気持ちを通じ合うようになり嬉しい」「見通しが持てるようになった」「悩んでいるお母さんに親子通園の良さを伝えたい」という声が聞かれるようになります。私たちは、このような子どもの成長の姿、保護者の自信につながる援助こそ、通園施設の大切な役割だと考えています。今後も、障害のある子どもと家族に、「通えて良かった」「困難があっても、ここがあるので大丈夫」と感じてもらえる療育や支援が提供できるように、こども園を続けていきたいと思います。